

石鎚山系 高瀑(たかたる)

堀江 誠克

■山行年月日:2022年2月26日

■メンバー:堀江誠克 東山高志(非会員)

レース仲間のフェイスブックに愛媛の山奥にある高瀑(たかたる)がアップされていた。高瀑は西日本最大級の滝で四国の最高峰、石鎚山のすぐ下にある。数年に一度、結氷するが、クライミングできるほど発達するのは稀だそう。今シーズンは当初から強い寒波が何度も入り、各地の氷瀑も当たり年で、高瀑も写真で見ると十分トップアウトできそうである。このチャンスを逃してはいけない。パートナーはまたまた、タックこと東山君。仙台から関空へ飛び、大荷物を持って大阪へ。モンベル本社での勤務を終えたタックと合流し、一路四国へ。順調に林道終点に到着し、車の中で仮眠をとる。

4時起床、5時出発。ヘッ電を付け、林道をアプローチ。いつもクライミングに向かうとき、一番で取り付かなくてはこのプレッシャーの中で急ぐが、たいして誰も登りに来ていなくて、ホットすると同時に肩透かしを食う。今回も同じだった。最近では高瀑を見物に来るハイカーが多いので、落氷が心配なので、ハイカーが来る前に登り切ってしまうのが理想だが、目の前に現れた高瀑は見たこともない大氷瀑で時間がかかりそう。横幅も広く、二人とも大興奮だ。下部は幾

分傾斜が緩そうなので1p目を行かせてもらう。登るにつれて傾斜が強まる。登りづらそうな垂直部の下で切って50m。続いて2p目のタック。段差をいくつか越え、つららの集合体となった最上部の下で切る。50m。高度感がすごい。取り付き付近にはハイカーが続々と訪れてくる。幸い滝の真下には来ないので落氷が当たる心配はない。最終pは自分の番だが、タックにリードを譲る。ちょっと不甲斐ないが仕方ない。登るにつれ巨大なクラゲの状の氷が合わさり、複雑な形状となる。カンテの乗越し、チムニー状、トラバースといろいろ出てくる45m。滝の落ち口までくると太陽の光がまぶしい。3回のラペルで取り付きへ。無事に戻ってこれで安心すると同時に、最高の充実感に包まれる。四国まで来た甲斐があったというものだ。車まで林道をダラダラ下り、最寄りの温泉で汗を流す。



高瀑 140m最終ピッチ